



Suntory Hall 20th Anniversary Performance  
Tokyo Symphony 60th Anniversary Performance  
LEHMAN BROTHERS Presents  
The Tokyo Symphony Orchestra & Suntory Hall  
Subscription Concert for Children

東京交響楽団60周年記念公演／サントリーホール20周年記念公演  
**LEHMAN BROTHERS Presents**  
東京交響楽団&サントリーホール  
こども定期演奏会 第17回

2006年4月15日(土)



SUNTORY HALL

このコンサートはサントリーホール エデュケーション・プログラムの  
一環として企画・開催されています。





# もっと知りたい楽器の魅力 ☆弦楽器編☆



オーケストラではヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスという4種類の「弦楽器」が演奏されます。胴体はマツやカエデなどの木材でつくられ、4本から5本の弦が張られています。弦を弓でこすって振動させ、この振動が木製の楽器全体に「共鳴」することで、美しい音が大きく響きわたります。弓には馬の毛のしっぽがはってあるんですよ。

今回の演奏会のテーマである「イタリア」は、弦楽器の製作で有名な国です。温暖な気候や、土地が弦楽器の製作に必要な木材やニスの人手に適していたこと、優れた製作者がいたことなど、様々な条件が重なり、弦楽器の製作は400年以上も前から今に至るまでイタリアの伝統として受け継がれてきました。

## ■ヴァイオリン

華やかな音色でメロディーを奏でることの多いオーケストラのリーダー的存在。甘くロマンティックな音色から、激しく荒々しい音色まで自由自在に奏でます。演奏する人もオーケストラの中で一番たくさんいます。大勢のメンバーで同じメロディーを演奏することによって音色や響きにも僅かな差が生まれ、厚みのある美しい旋律が生まれます。



## ■ヴィオラ

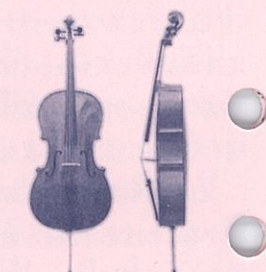
ヴァイオリンよりひとまわり大きく、やや低めで深くしぶみのある音色を出す楽器です。ヴァイオリンやチェロほど旋律を受け持つ機会は多くありませんが、短い音をきざんで音楽全体のテンポを作ったり、音楽に表情をつけたり、中音域でハーモニーを作ったりする大切なパートです。深みのある暖かい音色もっています。



ヴィオラ(左)とヴァイオリン(右)

## ■チェロ

宮沢賢治の名作「セロ弾きのゴーシュ」でおなじみの楽器です。音域は人間の声に近いと言われています。包み込むように豊かな音色や幅広い音域で人気があり、オーケストラでも旋律を弾いたり中音域を支えたり、伴奏を受け持ったりと大活躍です。演奏者は、楽器の下から出ているエンドピンと呼ばれる棒を床に立て、楽器を両足に挟み、椅子に座って演奏します。



## ■コントラバス

全長が約2メートルもある楽器。「コントラ」とは音楽用語で「特別に低い」という意味があります。他の弦楽器が5度間隔で行う4本の弦のチューニングを、コントラバスは4度間隔で行うほか、弦が5本のももあるなど、並はずれた大きさのほかにもユニークな点がいくつもある楽器です。とても低い音を出し、足下から響くようなどっしりとした重低音でアンサンブルを土台から支えます。



今日は、東京交響楽団の弦楽器奏者の方に、自分の楽器を紹介してもらいました。

## ■名前

- ① 楽器紹介(製作年・生産国)
- ② 楽器のエピソード、小さい頃の思い出など



### ■大谷康子(コンサートマスター)

- ① 1708年(あと2年でもうすぐ300歳) イタリア
- ② 今使っているヴァイオリンに出会うまでに約1年半探し回りました。出会った瞬間、「これだ!」と感じました。ヴァイオリンの顔のみただけで、私の好きな太い幅広い音が出そうだとわかったんです。私の大切な宝物です。



### ■田尻順(アシスタント・コンサートマスター)

- ① 1725年 イタリア
- ② 今使っているヴァイオリンは大人になってから手に入れました。自分にとっては親しい友達のようなまたは家族のような存在なのですが、もうすぐ300歳になろうかという楽器なので、ヴァイオリンには「フン、若僧め!」なんて思われてたりして……、と最近考えることもあります。ヴァイオリンさん、これから末永く仲良くしてね。



### ■廣岡克隆(アシスタント・コンサートマスター)

- ① 1696年 イタリア
- ② 両親が二人とも音楽家だったので、小さい頃から音楽に親しんでいました。こどもの頃はよくあったのですが、大人になってからも一度だけ弓を電車に置き忘れたことがあります。3日後に出てきましたが、今までの人生で一番最悪な3日間でした。今思いだしてもぞっとします。写真はヴァイオリンを習い始めた3歳頃、当時住んでいたバリの自宅で撮ったものです。



### ■板垣琢哉(第2ヴァイオリン首席)

- ① 1728年 イタリア
- ② 小学校低学年の頃、誕生日の朝起きたら自分のベッドの枕元に1つ大きいサイズの新しいヴァイオリンがありました。両親からのプレゼントで、とても嬉しかった思い出です。(ヴァイオリンは体の成長にあわせて、大きいサイズの楽器に買い換えています)



### ■清水泰明(第2ヴァイオリン首席)

- ① 1874年 フランス
- ② この楽器が作られた1874年は明治7年。日本では板垣退助らが自由民権運動を始め、そして大阪〜神戸間に鉄道が開業した年です。世界ではタイプライターが初めて発売され、また、シェーンベルクやホルストもこの年に生まれました。
- ③ 大学4年までは、中学生時代に神戸の楽器職人さんの工房で両親に買ってもらったそれほど高くない楽器を使い倒していました。川の土手で何時間も練習したり、今では考えられないような過酷な環境の下で荒々しく使用したものです。

ラベルの入った今の楽器を持ってから楽器に対する価値観が180度変わりました。音色や歌を追求するようになり、ヴァイオリンは大変繊細な楽器であることを知りました。本当に生



きていると感じられるような動物的な楽器です。湿度など環境によって状態が大きく変化します。一台一台まったく違う音が出ます。そして弓を使って理想の音を出す、そのことの難しさ、また更に良い音を求めると際限がありません。人類が作った究極の楽器の一つだと思います。



■坂井みどり(第2ヴァイオリン副首席)

- ① 1808年 イタリア
- ② ヴァイオリンの中には魂柱と呼ばれる小さな柱がたてられていて、表の板と裏の板を支えています。この小さな柱は、外から見えませんがとても大切な役目を果たしています。小学生の頃、うっかりヴァイオリンをケースごと落として、魂柱をたおしてしまったことがあります。あわてて弾いてみても、変な小さな音しか出ませんでした。ヴァイオリンの中をのぞいたら、たおれた魂柱がカラコロと音をさせて転がっていました。小さな柱ひとつで、音がこんなになってしまうとは！と、本当におどろきました。このとき、初めてあの小さな柱が「魂の柱」よばれる意味を理解しました。

■西村真紀(ヴィオラ首席)

- ① 1874年 イタリア
- ② 初めてヴィオラを弾いたのは中学生の時でした。それまでもヴァイオリンを習っていたので、ヴィオラを弾くのも簡単だと思っていたのですが…、実際は思ったより楽器の幅が大きくて重さもあり、音も低くてびっくりしました。全然弾けなくて落ち込んでしまったのを覚えています！



■武生直子(ヴィオラ首席)

- ① 1929年 イタリア
- ② 初めて弓で弦を弾いた時の嬉しかった気持ちは今でも憶えています。小学校2年生で、ちょうど写真に写っている頃です。大学を卒業後、ヴァイオリンからヴィオラに転向しました。ヴィオラに出会ってからは、多くの作品や人との出会いがあって日々世界が広がっていくのを感じています。



■Berndt Bohman ベアンテ・ボーマン(チェロ首席)

- ① 通常、楽器には、製作者の名前や作った年を書いたラベルが張られています。私のチェロにもラベルが付いていますが、とても古くて文字を読み取ることが出来ません。そのためいつ誰が作ったものか正確には分からないのです。おそらく1600年代の前半にイタリアで作られたのではないかと思います。約400年も前に作られた楽器が、今でもこんなに力強く甘く美しい音を出すなんて、とても神秘的なことだと思います。
- ② 私は音楽院でチェロを学んでいる頃からずっと、良いチェロを探し続けていました。「良い音」を出し、「手の届く価格」である楽器を見つけることは容易なことではないのです。ある時スウェーデンの友人から、「現役を引退したイタリア人のチェロ奏者が、楽器を売りがっている」と聞き、私は即座にイタリアへ飛びました。そして楽器を一目見て「fall in love」(恋におち)ました！持ち主のイタリア人奏者は、自分のチェロが楽器収集家のコレクションになることを望んでいませんでした。楽器としていつまでも美しい音を出し続けて欲しいと願い、演奏してくれる奏者を探していたそうです。このようにして私は今の楽器を手に入れることができました。

■音川健二(チェロ首席)

- ① 1856年 ドイツ
- ② 懐かしい写真が出てきましたので、皆さんに見ていただきたいと思います。私の師匠である斎藤秀雄先生は、今や伝説のごとき存在となっています。レッスンは空前絶後の厳しさで、音を二つ出しただけで「もう帰れ！」「お前は何をしに来たんだ！」と怒鳴られ、そして手は出す、物は投げるという状態、今だったら社会問題になるようなレッスン風景でした。しかし素晴らしいことは、先生の弟は全員が全員チェリストになっているということです。写真は昭和39年夏頃 旧広島駅 (毎夏に斎藤先生が宮島で行っていたチェロの夏合宿に向かう生徒達) 向かって左から 安田謙一郎、木越洋、松波恵子、藤原真理、堀了介、私



■笠原勝二(コントラバス首席)

- 色濃いむかって左側のコントラバスは私の楽器で、1740年にイタリアのジェノヴァのヴァイオリン職人ジュゼッペ・カヴレーリが作りました。15年ほど前に手に入れ、主にソロやアンサンブルで使っています。コントラバスの中ではかなり小さいサイズなのですが、高い音や早い動きが比較的弾きやすいだけでなく、温かい音が遠くまでよく届くという評判です。(演奏家は、自分の音を自分で離れて聞くことができないのです、残念！) 大きい方は東京交響楽団の楽器で、100年位前にボヘミア(現在のチェコ)のアントン・ルッツという人が作った楽器です。こちらは5弦(5本の弦が張ってある)なので、4弦の楽器よりも低い音を出すことができます。弦が5本ないと弾けない曲も多いんです。オーケストラではいつもこの楽器を弾いています。大きい楽器特有の幅広い響きに加えて、音色にハリとつやもあるとてもいい楽器です。コントラバスはいろいろな形や大きさのものがあるので、ステージに並んでいる楽器達をよく見比べると楽しいですよ、きっと！！



■渡辺哲郎(コントラバス首席)

- ① 2004年 イタリア
- オーケストラに入団して、今は5本目の楽器を使っています。これまでに古い楽器も新しい楽器も色々使ってきましたが、現在のものは2004年製の新作コントラバスです。色々な音色を創り出すことができて楽しいです。



■加藤信吾(コントラバス首席)

- ① 1818年 イタリア
- ② 小学生の時、音楽の先生に勧められてコントラバスを始めました。理由は簡単、「背が高かったから」です。あの先生の一言で、私の人生が大きく変わりました！





どこかに、困っている人がいる限り。日本財団

この地球で生活する人びとが幸せに暮らせるためのさまざまな支援。それが私たち日本財団の活動です。ボランティアや社会福祉、生涯スポーツや芸術の普及、海外協力、海洋環境改善のための研究…。そんな人びとの役に立つための活動を、それが本当に必要かどうかを自らの目で見極めながらサポートしています。

[www.nippon-foundation.or.jp/](http://www.nippon-foundation.or.jp/)



日本財団は、黒船の売り上げの3.3%をうけて活動しています。

救いの手になりたい。



We share a vision for the future and are proud to help build it.



Lehman Brothers salutes  
The Tokyo Symphony Orchestra &  
Suntory Hall Subscription Concert for Children

**LEHMAN BROTHERS**  
*Where vision gets built.*

とうきょうこうきょうがくだん しゅうねん き ねん こうえん  
東京交響楽団60周年記念公演 / サントリーホール20周年記念公演

LEHMAN BROTHERS Presents

とうきょうこうきょうがくだん  
東京交響楽団 & サントリーホール

てい き えん そう かい  
「こども定期演奏会」

おんがく くに おんがく まち  
《音楽の国》～音楽の街めぐり～

だい かい  
第17回 イタリア～ローマ・ミラノ・ヴェニス・ナポリ

ねん がつ にち ど かいえん  
2006年4月15日(土) 11:00 開演

サントリーホール 大ホール

か とう あさひ てい き えん そう かい きょく へんきょく ながやまよしひろ  
加藤 旭: 「こども定期演奏会 2006」テーマ曲 (編曲: 長山善洋)

Asahi Kato (arr. Yoshihiro Nagayama): Theme Music of "Subscription Concert for Children"

りはつし じょきょく  
ロッシーニ: オペラ『セビリヤの理髪師』序曲

Gioachino Rossini: Il barbiere di Siviglia, Overture

うた い き こい ト  
プッチーニ: オペラ『トスカ』から「歌に生き、恋に生き」♥

Giacomo Puccini: "Vissi d'arte, vissi d'amore", Tosca

だれ ね  
プッチーニ: オペラ『トゥーランドット』から「誰も寝てはならぬ」♠

Giacomo Puccini: "Nessun dorma!", Turandot

とう  
プッチーニ: オペラ『ジャンニ・スキッキ』から「わたしのお父さん」♥

Giacomo Puccini: "O mio babbino caro", Gianni Schicchi

わたし たいよう  
デイ・カプア: オ・ソレ・ミオ (私の太陽) ♠

Eduardo di Capua: O sole mio

つばきひめ かんばい うた  
ヴェルディ: オペラ『椿姫』から「乾杯の歌」♥♠

Giuseppe Verdi: "Libiam ne' lieti calici", Traviata

さわはた えみ ♥  
ソプラノ: 澤畑恵美

ふくい けい ♠  
テノール: 福井敬

きゅうげい  
— 休憩 —

だい せんぼう だい ばん  
ガブリエーリ: 第7旋法 第2番  
Giovanni Gabrieli: Canzon septimi toni No.2

きょうそうきょくしゅう し き はる  
ヴィヴァルディ: 協奏曲集『四季』から「春」  
Antonio Vivaldi: La primavera (Le quattro stagioni)

おわたにやす こ  
ヴァイオリン: 大谷康子

こうきょうきょくだい ばん ちょうちょう だい がくしょう  
メンデルスゾーン: 交響曲第4番 イ長調「イタリア」第4楽章  
Felix Mendelssohn Bartholdy: The 4th movement from Symphony No. 4 in A major "Italian", op.90

まつり だい きょく こうげんさい  
レスピーギ: 『ローマの祭』から第4曲「公現祭」  
Ottorino Respighi: 'La Befana' from "Feste romane"

し き おおとも なお と  
指揮 & おはなし: 大友直人

かんげんがく とうきょうこうきょうがくだん  
管弦楽: 東京交響楽団

しゅざい ざいだんほうじん とうきょうこうきょうがくだん  
主催: 財団法人 東京交響楽団 / サントリーホール

とくべつきょうざん  
特別協賛: LEHMAN BROTHERS

じよせい  
助成:  日本財団  
The Nippon Foundation

こうえん みなとくきょういっくいんかい  
後援: 港区教育委員会

(再生紙使用)



おおもなおと  
大友直人

今年で、こども定期演奏会は5年目のシーズンを迎えます。

昨年引き続き、今年も世界中のさまざまな「音楽の国」にゆかりのある音楽を取り上げて、素敵な音楽会をつくっていききたいと思います。第1回の今回は、芸術の国、イタリアにスポットをあてて、ローマ、ミラノ、ヴェニス、ナポリといったイタリアの街にゆかりのある名曲をお聴きいただきます。

イタリアは、あらゆる芸術でた国ですが、音楽も歴史と伝統を誇り、とりわけオペラには、格別のすばらしさがあります。古くはバロック時代から、ヴィヴァルディやガブリエーリなどのすぐれた作曲家を輩出していますし、ロッシーニ、ヴェルディやプッチーニといったオペラの大家から、近代オーケストレーションの名手であるレスピーギなど、枚挙にいとまがないほどたくさんの大作曲家を生み出して

ます。また、イタリアは世界中の作曲家を魅了し続けてきた国でもあるのです。本日のプログラムでは、ドイツ人のメンデルスゾーンがイタリアに触れられて書いたシンフォニーも演奏いたします。輝きに満ちたイタリアの音楽の魅力味わっていただければ幸いです。

今年もまた新しいテーマ曲が始まります。1年間、開演時に演奏していただきますので、楽しみにしてください。

これまでの4年間で、こども定期演奏会のお客さまと、私と東京交響楽団、サントリーホールの間に、強いきずなができあがってきているように感じられるのは、たいへん嬉しいことです。また新しく今シーズンからお客さまになられるみなさんとの出会いも楽しみにしています。今年もみなさんと楽しいコンサートをつくっていきましょう。



© 篠原栄治

指揮・おはなし 大友直人

東京交響楽団 常任指揮者。1958年東京生まれ。桐朋学園大学卒業。小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、岡部守弘に学ぶ。プレヴィン、バーンスタイン、マルケヴィチからも指導を受ける。22歳でデビュー以来、日本の主なオーケストラの演奏会で活躍。日本フィルハーモニー交響楽団正指揮者、大阪フィルハーモニー交響楽団指揮者をへて、1991年から東京交響楽団正指揮者として、自らのプロデュースによる「東京芸術劇場シリーズ」などで人気を集めている。また1994年には京都市交響楽団首席指揮者となった。2001年は、ロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団、コロラド交響楽団やインディアナポリス交響楽団に客演したほか、イギリスの名門、フィルハーモニア管弦楽団来日公演の指揮もおこない、いずれも好評を得た。現在、京都市交響楽団常任指揮者、東京文化会館音楽監督。

■「オーケストラへの質問」を募集します！  
次回公演プログラムから、「オーケストラQ&A」のページで、みなさんからの質問や疑問にお返事をいたします。別紙に記入して、ホールロビーに置いてある「お手紙回収箱」に入れてください。みなさんからの質問をおまちしています！

■こども定期演奏会2006年度シーズン

2006年度こども定期演奏会  
《音楽の国》～音楽の街めぐり～  
指揮&お話=大友直人  
演奏=東京交響楽団  
会場=サントリーホール

第18回 7月22日(土) 11:00

『アメリカ』

～ニューヨーク・ボストン・ニューオリンズ～  
バーンスタイン：『キャンディード』序曲  
ガーシュウィン：ラプソディ・イン・ブルー  
ジョン・ウィリアムズ作品より、他

第19回 10月21日(土) 11:00

『ガラ・コンサート』

曲目：未定  
5周年を祝うガラ・コンサート  
何が出るかお楽しみ！

第20回 12月9日(土) 11:00

『ドイツ』

～ベルリン・ミュンヘン・ライプツィヒ・ドレスデン～  
ウェーバー：『魔弾の射手』序曲  
ワーグナー：ワルキューレの騎行  
R. シュトラウス：交響詩『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』、他

■こども定期演奏会 公式ホームページ

www.codomoteiki.net

過去のコンサートの一部を映像でご覧いただくことができます！





かんげんがく とうきょうこうきょうがくだん そくりつ しゅうねん  
**管弦楽 東京交響楽団 (創立60周年)**

1946年に創立された日本を代表するオーケストラ。長年にわたる優れた音楽活動にたいして、毎日音楽賞や文部大臣賞、音楽之友社賞、京都音楽賞、毎日芸術賞、モービル音楽賞、サントリー音楽賞など数々の賞を受賞。また、フランス・オーヴィディス社

からCDが全世界発売されるなど、海外での評価も高い。1978年からこどもたちに音楽の楽しさ、すばらしさを知ってもらうことを目指して『年少少女のための春休み/夏休みコンサート』『オーケストラ名曲館』『名曲の旅』を開き、多くのこどもたちと交流してきた。

コンサートマスター  
大谷康子

服部亜矢子  
福留史絃  
宮原祐子

ゲストコンサートマスター  
グレブ・ニキティン

渡辺裕子

アシスタント・コンサートマスター  
田尻 順  
廣岡克隆

ヴィオラ  
西村真紀○  
武生直子○  
安藤史子  
大野順二

第1ヴァイオリン

枝並千花  
大和田ルース  
小川敦子  
加藤幸子  
木村正貴  
小林亮子  
立岡百合恵  
日野 奏  
藤原 真  
堀内幸子  
宮本 陸  
吉川万理

加護谷直美  
小西応興■  
永井聖乃  
松崎里絵  
森 みさ子  
山廣みほ

チェロ

ベアンテ・ポーマン○  
音川健二○  
大塚正昭  
アデル・亜貴子・カーズ  
川井真由美  
黄原亮司

第2ヴァイオリン

板垣琢哉○  
清水泰明○  
坂井みどり○  
阿部真弓  
上原末莉  
内田史子  
小川さえ子  
塩谷しずか  
野村真澄

謝名元 民  
鷹栖光昭  
馬場隆弘

コントラバス

笠原勝二○  
渡辺哲郎○  
加藤信吾○  
小林照雄  
久松ちず

永久名誉指揮者

アルヴィド・ヤンソンス  
上田 仁  
遠山信二

桂冠指揮者

秋山和慶

音楽監督

ユベール・スダーン

常任指揮者

大友直人

正指揮者

飯森範親

フルート

相澤政宏○  
甲藤さち○  
高野成之  
中川 愛

オーボエ

池田 肇○  
篠崎 隆  
福井貴子

クラリネット

十亀正司○  
エマニュエル・ヌヴェー○  
小林利彰

ファゴット

大埜展男○  
福井 蔵○  
内田秋雄  
千村雅信

ホルン

竹村淳司○  
ジョナサン・ハミル○  
甲田幹雄○  
大和田浩明  
阪本正彦  
曾根敦子

トランペット

佐藤友紀○  
アントニオ・マルティ○  
大隅雅人

野沢岳史

前田健一郎

トロンボーン

荻野 昇○  
上原規照  
宮本直樹

テューバ

渡辺 功○

ティンパニ&パーカッション

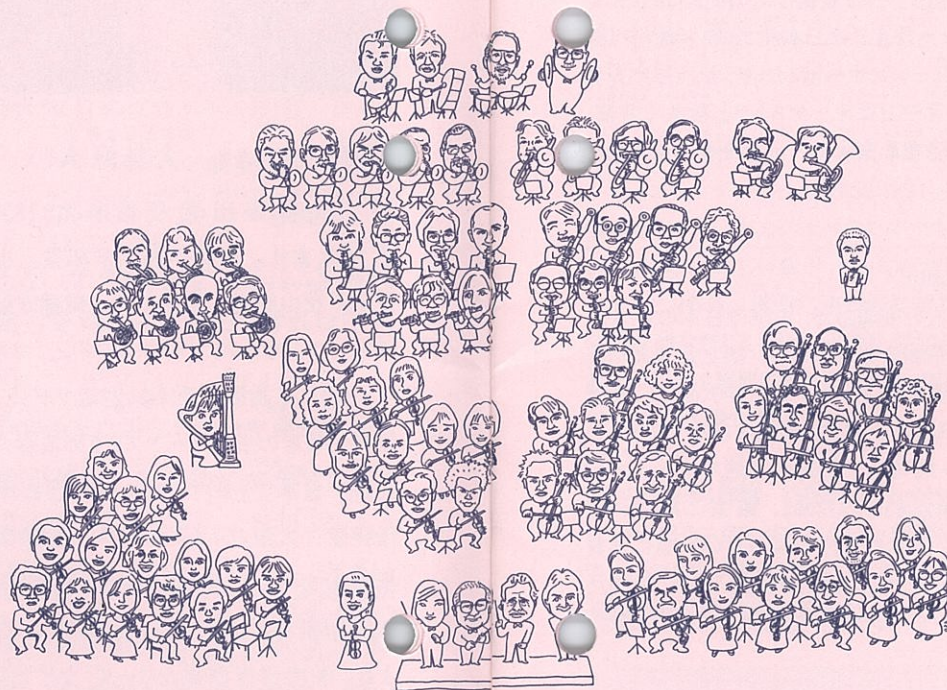
奥田昌史○  
新澤義美○  
天野佳和  
塚田吉幸■

荣誉団員

岩澤康裕

○ 首席奏者

■ インスペクター







■ソプラノ **澤畑恵美** Emi Sawahata, soprano  
 国立音楽大学卒業、同大学院修了。文化庁オペラ研修所修了。第58回日本音楽コンクール声楽部門第1位。第21回ジロー・オペラ賞受賞。文化庁派遣芸術家在外研修員としてミラノへ留学。『フィガロの結婚』のズザンナ役、『椿姫』ヴィオレッタ役ほか数多くのオペラでその魅力を余すところなく発揮している。03年『ばらの騎士』ゾフィー役では名演出家G.クレマーより最大級の賛辞が寄せられた。最近では三木稔作曲：オペラ『しよるり』（日本語版日本初演）に主演。コンサートにおいても、G・ベルテニーニ、E・インバルなどの著名指揮者や主要オーケストラと数多く共演。気品ある歌唱と華のある舞台姿で、現在最も人気・実力を兼ね備えたプラノである。二期会会員。



■テノール **福井敬** Kei Fukui, tenor  
 輝かしい声と情感あふれる演技、幅広い表現力で、いまや日本のオペラ、声楽界を代表するテノールとして最も信頼を集めている。国立音楽大学卒業。同大学院、文化庁オペラ研修所を修了。イタリア留学後、二期会創立40周年記念『ラ・ボエム』でデビュー。以来、新国立劇場『ローエン格林』、Bunkamura『トゥーランドット』など、話題の公演で次々と大役を演じ、絶賛されている。最近では新作オペラ『白鳥』、東京二期会『ラ・ボエム』などに相次いで主演。常に渾身の演技と質の高い歌唱に賞賛の声が止まない。芸術選奨文部大臣新人賞、出光音楽賞、エクソンモービル音楽賞 洋楽部門本賞、ジロー・オペラ賞など多数受賞。二期会会員。



■ヴァイオリン **大谷康子** Yasuko Otani, violin  
 東京芸術大学、同大学院博士課程修了。全日本学生音楽コンクール全国1位、シェリング来日記念コンクール第2位。1990年には、ローマ、ウィーン、ベルリン、ケルンでリサイタルを開き、好評を得る。日本各地でのリサイタル、スロヴァキア・フィルなどとの共演の他、海外へ招かれての演奏、テレビ、ラジオなどへの出演、さらに室内楽、現代音楽の分野にも力を入れ、常にその意欲的な活動は多くのファンからの支持を得ている。また病院や各種施設でのボランティア活動にも精力的に取り組んでいる。95年東京交響楽団コンサートマスターに就任し、現在に至る。99年のサントリールホール大ホールでのリサイタルは満員の聴衆を魅了した。現在東京音楽大学教授。CDはSONY『椿姫ファンタジー』他がリリースされている。

プログラム・ノート

ありた さかえ おんがくがく  
**有田 栄 (音楽学)**

■ロッシェニ作曲 オペラ『セビリヤの理髪師』序曲

「イタリアのモーツァルト」とよばれたジョアキーノ・ロッシェニ (1792-1868) は、当時イタリアだけでなく、ヨーロッパ中で一番人気のあるオペラの作曲家でした。『セビリヤの理髪師』は、スペインの町セビリヤを舞台にしたオペラ。陽気な召使いフィガロが知恵をしばって、ご主人様の伯爵と美しい娘ロジーナとの恋をおうえんするお話です。ロッシェニの楽しい音楽、とくに人気者のフィガロの歌は、大ヒット・ソングでした。

■プッチーニ作曲 オペラ『トスカ』から「歌に生き、恋に生き」

ジャコモ・プッチーニ (1858-1924) は、オペラの国イタリアが生んだ、大作曲家の一人です。彼が書いたたくさんのおペラの中でも、『トスカ』はもっともドラマティックな作品です。主人公のトスカは、美しい歌手。恋人の画家、カヴァラドッシと深く愛しあっています。けれどもカヴァラドッシは、警察に追われる友人を逃がしたためにつかまってしまい、死刑になることに。それを知ったトスカは、自分をぎせいにして彼を助けようと決心します。これは、「私はほこり高く、正しく生きてきたのに、なぜこのように苦しまなければならないのですか」と泣きながら神に祈るトスカの歌です。

■プッチーニ作曲 オペラ『トゥーランドット』から「誰も寝てはならぬ」

プッチーニのオペラには、一度聴いたらけって忘れられない、すてきなアリア (歌) がたくさんあります。そうしたアリアでは、歌手たちのすばらしい声だけでなく、オーケストラもまた、登場人物たちの心の動きをいきいきと描きます。

「こども定期演奏会 2006」のテーマ曲について 加藤 旭さん (神奈川県大井町立上大井小学校1年)

はくは、3歳でピアノをならいはじめました。そのころがくふも好きになり、らくがき帳があるとしてクレヨンで5本線を引いておんぶを書いていた。今ではだいぶん細い五せんふノートにもおんぶを書けます。

ピアノをひいている時や、どこかでかけた時などにしぜんにメロディーが生まれます。書き始めるともっと曲がわいてきて止まらなくなります。夜はねないといけないのでいつもじかんがたりません。

この曲は、ようちえんでおともだちと走りまわっていた時に思いつきました。楽しいことがどんどんあふれてくるイメージです。

作った曲をたくさんのがつきでえんそうしてもらえるのはとてもうれしいです。早く自分でオーケストラのがくふを書きたいです。



『トゥーランドット』は、中国を舞台にしたオペラです。美しいトゥーランドット姫は、結婚をもうしこむ若者に謎をかけ、とげなければ首をはねてしまうという、冷たい心の持ち主でもありました。その謎をみごとに解いたのは、王子カラフ。それでもがんに結婚をはねつけようとすする姫に、王子は、朝までに自分の名前を当ててみなさい、とぎやくに謎かけをします。その夜、運命の夜明けを待ちながら、王子は姫への深い愛を歌います。

### ■ブッチーニ作曲 オペラ『ジャンニ・スキッキ』から「わたしのお父さん」

中世のフィレンツェの町を舞台にした『ジャンニ・スキッキ』は、イタリアの有名な作家ダンテの作品にもとづいて書かれたオペラ。お金持ちの老人の残した財産をめぐる争うよくばりな親せきたちを、頭のいいジャンニ・スキッキがだましてしまう、というこっけいな喜劇（人間のすがたをありのままに描いた劇）です。このアリアは、ジャンニ・スキッキの娘ラウレッタの歌。恋人のリヌッチオとどうしても結婚したいラウレッタは、父親に心を打ち明け、心をこめて歌います。

### ■ディ・カプア作曲 オ・ソレ・ミオ(私の太陽)

音楽の国イタリアの中でも、南イタリアの港町ナポリは、とりわけ歌を愛する人々の集まる町として知られています。昔から毎年のように歌合戦が開かれ、漁師さんから王や貴族までが参加して歌をきそったと言われているほどです。そんなナポリの人々の歌は、「ナポレターナ」とよばれ、世界中の人々に親しまれています。エドゥアルド・ディ・カプア(1865-1917)が、ジョヴァンニ・カプッロという人の詩に作曲したこの『オ・ソレ・ミオ(私の太陽)』も、有名なナポレターナのひとつです。

### ■ヴェルディ作曲 オペラ『椿姫』から「乾杯の歌」

北イタリアのミラノで活躍したジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)のオペラも、人間を力強く、情熱的に描くことで知られています。人々からけいべつされるような人、みにくい姿の人であっても、美しい心や、すばらしい知恵があるのだ——そんな人間の「本当のすがた」を描くのが、ヴェルディはとても得意でした。

この『椿姫』は、ももとの題を「ラ・トラヴィアータ(道をはずれた女)」と言います。主人公のヴィオレッタは、楽しければそれでいい、と自分の好きかってな生き方をしていましたが、ある日アルフレードという一人の若者と出会って、人を本当に愛するとはどういうことかを知ることになります。その愛は、はたして彼女を幸せにしてくれるのでしょうか…。この歌は、オペラの始まりはなやかなパーティーで二人が出会う、その場面で歌われます。

### ■ガブリエーリ作曲 第7旋法 第2番

ジョヴァンニ・ガブリエーリ(1554ごろ-1612)は、イタリアの水の都、ヴェニス(ヴェネツィア)で活躍した作曲家です。ヴェニスには、サン・マルコ大聖堂という大きな教会があり、彼はそのオルガニストでした。この教会の建物は、上から見るとちょうど十字架の形をしています。そこでむかしから、その十字架の左右の「手」にあたる場所に、それぞれアンサンブルをおい

て演奏する習慣がありました。2つのアンサンブルは、ちょうど「こだま」が響くように、会話したり、追いかけてこをしたりするように演奏します。大きな教会の中いっばいに響く、不思議な音の世界を体験してみてください。

### ■ヴィヴァルディ作曲 協奏曲集『四季』から「春」

アントニオ・ヴィヴァルディ(1678-1741)は、今から300年くらい前に、やはりヴェニスで活躍していた作曲家です。彼は有名なヴァイオリニストで、右手に持った弓の動きひとつで、自然の景色や、人の心の動きを、自由自在に描くことができました。

『四季』は、ヴァイオリンのソロ(独奏)とオーケストラとで演奏する、「協奏曲」という種類の音楽です。この曲では管楽器を使わず、オーケストラも少人数ですが、弦楽器だけでとてもたくさんを表現しています。——春がやってきて、うれしそうにさえずっている小鳥たち。やさしく吹くそよ風。泉から流れる小川のせせらぎ。とつぜん空が暗くなり、雷がとどろいて、春の風がやってきます。けれどもしばらくすると、また春のうらかな日ざしがもどり、鳥たちの歌声が聴こえてきます。

### ■メンデルスゾーン作曲 交響曲 第4番 長調『イタリア』から第4楽章

フェリークス・メンデルスゾーン・バルトルディ(1809-47)は、200年ほど前、19世紀に活躍したドイツの作曲家です。こどものころからもうプロのピアニストとして、ヨーロッパ中あちこちを旅しては演奏会を開いていました。たくさんの国に行った中で、いちばん心に残った国はどこですか、とたずねたら、メンデルスゾーンはきっこう言ったでしょう。それはイタリアです。と。イタリアの青い空や、緑の野山、そしてナポリやローマの町で見たさまざまな祭や儀式のようすが、この交響曲の中にもいきいきと描かれています。

第4楽章からは、冬の終わりと春の始まりを告げる祭、「謝肉祭」のわくわくするようなふんいきが伝わってきます。「サルタレッロ」や「タランテッラ」などとよばれる、イタリアの踊りのリズムが使われています。

### ■レスピーギ作曲 『ローマの祭』から第4曲「公現祭」

オットリーノ・レスピーギ(1879-1936)は、20世紀のはじめにローマで活躍した作曲家。彼は、ローマの町の風景を、『ローマの噴水』や『ローマの松』、そしてこの『ローマの祭』などの作品の中にえがいています。

これは、『ローマの祭』の中の一曲です。イタリアで「ベファーナ」とか「エピファニア」とよばれる「公現祭」はクリスマスのお祭りの一つ。2週間続くクリスマス・シーズンの最後の日、1月6日に行なわれます。この日は、赤ちゃんのイエスさまに、東の国からやって来た3人の博士がおくり物をした日だと言われていますが、イタリアでは、その時いっしょに魔女のお婆さんもやってきてお祝いをしたという言い伝えがあります。ですからイタリアのこどもたちは、12月25日ではなく、この日にクリスマス・プレゼントをもらうんですよ！レスピーギの曲から、にぎやかな祭の広場のようすが聴こえてきませんか。



歌に生き、恋に生き ——ブッチーニ「トスカ」から

トスカ  
私は芸に生き、愛に生き、  
決して人に悪いことをしませんでした。  
惨めな人たちを知らば  
そっと手を差し伸べて助けました。

いつも誠の信仰を込めた  
私の祈りは  
聖壇に昇り、

いつも誠の信仰を込めて  
私は祭壇に花を捧げました。  
苦しみの時に、

どうして、どうして、主よ、  
私にこのような報いをお与えになるのですか？

私は聖母様の外套に  
宝石を捧げましたし、  
星々に歌を捧げれば、  
星々は天上で一層美しく微笑しました。

苦しみの時に、  
どうして、どうして、主よ、  
私にこのような報いをお与えになるのですか？  
(あずさ まゆみ 訳)

誰も寝てはならぬ！  
——ブッチーニ「トゥーランドット」から

カラフ  
誰も寝てはならぬ！  
姫君も 愛と期待にふるえた星を  
眺めておられるだろう  
だが私の秘密は この胸に…  
私の名は 誰も知らない

いや 私があなたに伝えよう  
夜明けの光が輝いた時に！  
そして 私の口づけが沈黙を溶かし  
あなたは 私のものになるだろう  
消えよ おお夜よ 星よ  
夜明けには 勝つだろう！  
勝つのだ！

(増田恵子 訳)

わたしのお父さん  
——ブッチーニ「ジャンニ・スキッキ」から

ラウレッタ  
ああ、私の大切なお父様、  
あの人が好きなの、すてきな人なのよ。

私はポルタ・ロッサに  
指輪を買いに行きたいわ。  
ええ、どうしても行きたいの！

でも、私の恋が叶わないなら、  
ポンテ・ヴェッキオに行くわ、  
アルノ川に身を投げるためよ。

私は胸が締め付けられるようで苦しいの。  
ああ、お父様、死んでしまいたいほどよ！  
お父様、お願い、お願い！

[註]  
ポルタ・ロッサ[赤門]：フィレンツェの場所の名前  
ポンテ・ヴェッキオ[古橋]：橋の名前

(あずさ まゆみ 訳)

ディ・カプア：オ・ソレ・ミオ(私の太陽)

太陽の輝く日は、なんとすばらしいのだろう。

太陽の輝く日は、なんとすばらしいのだろう。  
嵐のあと、空気は澄み切っている。  
爽やかな空気のため、祭りのようだ…  
太陽の輝く日はなんとすばらしいのだろう。

\*だが、僕には、  
っとすばらしい太陽が生まれた、ああ、かわいい娘よ  
僕の太陽は  
君の瞳に在る。

君の窓のガラスは輝いていた。  
一人の洗濯女が誇らかに歌っている、  
衣類を絞り、広げ、歌っている。  
君の窓のガラスは輝いていた。

だが、僕には、(以下略 ★から繰り返す)

夜が近づいて、陽が沈むと、  
憂愁にも似た思いが訪れる。  
僕は君の怒りに佇んでいたい、  
夜が近づいて、陽が沈む時。

だが、僕には、(以下略 ★から繰り返す)  
(あずさ まゆみ 訳)

と杯の歌 ——ヴェルディ「椿姫」から

アルフレード  
大いに飲みましょう、美しい女が  
花を添える喜ばしい盃で飲みましょう。  
はかない束の間  
快樂に酔いしれるように！  
愛が呼び覚ます甘いときめきのうちに、  
大いに飲みましょう、  
あの眼差しは、この心には

全能なのですから。  
大いに飲みましょう、愛の口づけは、盃のあいだで  
ひとしお熱くなるでしょう。

全員  
大いに飲みましょう、愛の口づけは、盃のあいだで  
ひとしお熱くなるでしょう。

ヴィオレッタ  
皆さんと、私の楽しい時を  
分かち合うことができるでしょう。

この世では、楽しみでないものは  
みんな馬鹿げています。  
楽しみましょう、愛の喜びは  
たちまち逃げ去ります。

それは、生まれては死んでゆく花で、  
もう二度と楽しむことはできません。  
楽しみましょう、心をそそる熱い言葉が  
私たちを招いています。

全員  
さあ、楽しみましょう、盃と歌と笑いが  
夜を彩り、  
新しい日の夜明けが、  
この楽園で私たちを見出しますように！

ヴィオレッタ  
陽気な集いにこそ人生が有るのですわ。

アルフレード  
愛していない時なら。

ヴィオレッタ  
愛を知らない者に、そんなことをおっしゃらないで！

アルフレード  
愛するのは私の運命なのです。

全員  
さあ、楽しみましょう、盃と歌と笑いが  
夜を彩り、  
新しい日の夜明けが、  
この楽園で私たちを見出しますように！

(あずさ まゆみ 訳)



おんがく くに  
音楽の国めぐり(1) —— イタリア

電車に乗って、ヨーロッパを旅していると想像してみてください。北の国から、まだ白い雪の残るアルプスをこえ、しだいに南へと、イタリアへと入っていきます。するとどうでしょう。重い灰色の空が、やがて明るい青い色に変わり、黒々とした森が、あざやかな緑の森に変わり、太陽が急に明るくかがやきはじめたように感じるのです。気のせいかな、人々もおしゃべりになったように思えてきます。そう、イタリアは、ヨーロッパの中でさいしょに春がおとずれる国です。「あなたはあの国を知っていますか。レモンの花が咲き、緑の葉のかげに金色のオレンジが実る国。青い空からそよ風が吹き、ミルテやぼだいじゆの木がしげるあの国を。その国に、恋人よ、私はあなたといっしょに行きたいのです…」——これは、ゲーテというドイツの詩人の書いた有名な詩ですが、北国の人たちのイタリアへのあこがれを、とてもよく表していると思いませんか。

イタリアでは、どの町にも古い歴史があり、何百年も前からすばらしい文化が受けつがれてきました。古い建物がたくさんある首都の「ローマ」は、キリスト教のもっとも重要な教会があるところで、たくさんのおんがくが生まれました。大きな美術館がある「フィレンツェ」は、昔はお金持ちの商人や貴族がたくさんいて、おおぜいの音楽家たちをやとっていました。はなやかな宮廷音楽の栄えた町です。水にかこまれた町「ヴェニス(ヴェネツィア)」は、大きな教会と劇場があるので、教会音楽とオペラがさかん。陽気な港町「ナポリ」は、歌を愛する人々の町でもあり、オペラだけでなく、数えきれないほどの民謡が歌われてきました。そしてファッション・ショーで知られる「ミラノ」もオペラの町ですが、20世紀には電子音楽のスタジオがいちはやく作られ、現代音楽の中心地にもなりました。

そんなイタリアの文化にあこがれて、バッハやモーツァルトやベートーヴェンの時代から、いえそのずっと前から、ヨーロッパ中の、そして世界中の音楽家たちがイタリアにやってきました。そして、きょうのみなさんのように、音楽の香りを胸いっぱいにつけて、また世界中へととはばたいっていったのです。

おんがく くに  
音楽の国

だい かい へん  
第1回 イタリア編

アントニオ・マルティさん(東京交響楽団 首席トランペット奏者)

オペラ発祥の地、イタリアは、きょうみなさんに聴いていただいた作品をはじめ、たくさんのおんがくを生んだ国です。「イタリアも大好き」という、スペイン出身のマルティさんにナビゲーターをお願いしました。

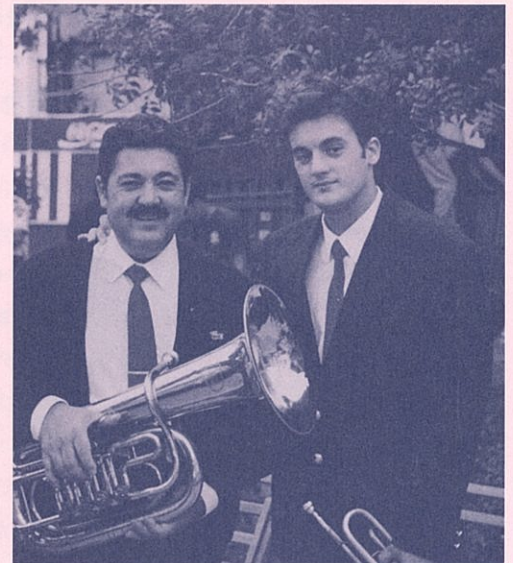


——スペイン・バレンシア出身のマルティさんですが、ユース・オーケストラの演奏旅行でイタリアにいらしたことがあるそうですね？

17歳のとき、スペイン国立ユース・オーケストラのツアーで、ローマ、ヴェニス、シチリアに行きました。その少し前、15～16歳のときには、こどものときから入っていたバンドでトスカーナ地方をまわったこともあります。イタリアもそうですが、スペインでは、カトリック信仰に基づいたバンド音楽の伝統があります。それぞれの街にはかならずバンドがあり、毎週日曜、街や村の幸運を祈って、行進しながら演奏するのです。イタリアとスペインは近いので、お互いにバンドの「交換」もしていました。スペインからイタリアに演奏に行き、お返しにイタリアからスペインに演奏に行く、というわけで、僕がトスカーナに行ったのもその一環でした。バンドは、僕にとって、音楽の「最初の学校」です。音楽好きのこどもは、お父さんが演奏しているバンドに入って音楽を学び、さらに道を究めたいと思ったらコンセルヴァトワールにすすんで専門的なレッスンを受けるのです。イタリアでも同じではないでしょうか。僕は当時ユーフォニウムを吹いていた父のバンドに10歳から入って、トランペットを選びました。

——なぜトランペットを？

小さいときから父の横に座ってバンドの練習を聴いていて、ずっと憧れていたんです。バンドは管楽器ばかり80人近い編成でしたが、そのなかでもトランペッ



16歳のとき、バンドの演奏旅行で訪れたトスカーナ地方で。左は最愛の父、ルチオさん。



トは華やかなソロを受け持つ、重要な役割だったのです。初め、ソルフェージュと小さなトランペットの手ほどきを父から受け、さらに父のバンドのトランペット奏者に習い始めました。最初は音を出すのが大変でしたが、練習は大好きでした。

ユース・オーケストラは、Spanish National Youth Orchestraといって、国の教育プログラムに組み込まれています。

10代の若者を2年間オーケストラでトレーニングするシステムで、入るには厳しいオーディションがあります。僕は16歳から2年間演奏しました。コンサートにも父と一緒によく行きましたね。「子ども定期」とは違うのですが、テネリフェ交響楽団にも「Young Talent Concert」という若手奏者のためのコンサートがあり、ソリストに選ばれて演奏したこともあります。

——初めてのイタリアはどんな印象でしたか？

「わが家」という感じがしました。言葉も似ているのでなんとなくわかりましたし、知り合った人たちもみな陽気で温かくいい人たちでした。たくさん食べ、飲むのもスペイン人と同じ。電車やバスがいつくるかわからないのも同じ(笑)。人生を楽しんでいる感じがしていますね。違うと思ったら、イタリア人のほうが情熱的で、すべてにおいてちょっとおおげさなところかな。だからこそ、あれだけドラマティックなオペラが生まれたのでしょう。

僕は歴史が好きなので、バチカンのシスターナ大聖堂とローマのコロッセオがとても印象的でした。いたるところに歴史の重みを感じて感動しました。観光に行ったヴェニスも、すばらしく美しい、ロマンティックな街ですね。イタリア人が自分たちの歴史に誇りをもち、敬意



バチカンのまち

をはらっているのはすばらしいことだと思います。そして音楽好きであることも。

——イタリア音楽の特徴、魅力についてどう見られますか？

イタリア・オペラのストーリーはドラマティックですよ。フランスやスペインの物語は、なにか出来事が起こって、そのまま続き、さてどうなるでしょう?というところで終わることが多いのですが、イタリアの物語は『トスカ』や『トラヴィアータ』のように、恋におちたり事件が起こったりした後で、最後に誰かが死んでしまうのです



ローマのコロッセオ

(笑)。かならず黒か白かの結論をはっきりさせる。これが“イタリア的”といえるのではないのでしょうか。

バロック時代、イタリアでは、どれだけ演奏できる能力があるか「誇示する show off」ことが大切とされていました。『セビリヤの理髪師』のように、たくさんの音、速いパッセージを演奏する曲は、その特徴を受け継いでいると思います。その後、どれだけ情熱的に歌えるか、表現力が高くじょうゆう、さくひん、か、びく、いちばん、す、きよく、現力が重要になり、ドラマティックな作品が書かれるようになったのです。僕の一番好きな曲はヴェルディの『レクイエム』で、曲の冒頭から、実にさまざまな音楽の表現が盛り込まれていることがわかります。エキサイティングで力強く、同時に暗い面(ダークサイド)、悲劇的な部分もあわせもっている、すばらしい作品です。

そしてイタリア音楽には、美しい魅力的なトランペットのソロが多いのが嬉しいですね。また、生を楽しみ、情熱的で、自然の恵みをいつくしむイタリア人の感情がこめられているように思います。

——最後に、小さいときのことをもう少し聞かせてください。いたずら坊やでしたか、おとなしいこどもでしたか？

どちらかというどちうじんなこどもでした。それは父をととても尊敬していて、父の教えに忠実に従いたいと自分で思っていたからです。学校ではちょっと変わったこどもと思われていたと思います。いつも学校にトランペットを持って行き、休憩時間も友だちとサッカーをしないでトランペットの練習をしていましたから。小さいときは月曜日から金曜日まで週5日、学校が2時に終わると1時間かけてバスでテネリフェに行き、4時から7時までソルフェージュ、和声、トランペットとピアノのレッスンをして帰りました。レッスンのない日は、家に帰って夕食まで、地下に特別つくってもらった練習室にもって練習していました。一度も部屋を出ないことが多かったので、いつだったか母が、僕が帰ったことに気づかず、「いない、いない」と大騒ぎして警察を呼んでしまったこともあったんですよ。

父は普段は優しい人ですが、音楽に関してはとても厳しい人です。けれども、一度として強

いすることはありませんでした。いつも愛情をもって僕に接し、適切なアドバイスをしてくれました。そしてなによりも、自ら30年近く、1日も欠かさず演奏し努力する姿を見せてくれたことが大きいです。父は僕のヒーロー。いま僕があるのは、父のおかげです。母はとても優しい人で、いつも支えてくれました。両親を心から尊敬しています。 イタリアの写真提供: イタリア政府観光局(ENIT)



ヴェニスのゴンドラ